
りんたん！

牧村沙夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りんたん！

【Nコード】

N7955W

【作者名】

牧村沙夜

【あらすじ】

西暦2111年。止まらぬ少子高齢化によって慢性的な労働力不足に陥っている国、日本。その首都である東京の300キロ東に造られた海上都市　？新東京？では、違法な技術によって生み出されたサイボーグ達による犯罪が頻発していた。その犯罪に対抗するため、法律の穴を掻い潜って生み出された4人のサイボーグによって結成された組織　？エレメンツ？。そのリーダーである、りんたんこと剣崎燐は今日も凶悪犯罪に立ち向かう！

プロローグ（前書き）

タイトル詐欺です。誤字脱字、または読み難いと思われる箇所がありましたら、ご指摘お願いします。

プロローグ

西暦2111年。

止まらぬ少子高齢化によって慢性的な労働力不足に苦しんでいる国、日本。

その首都、東京から300キロ東に浮かぶ海上都市　？新東京？では、倫理的理由などから違法とされている新技術によって生み出されたサイボーグ達による凶悪な犯罪が頻繁していた。

その対応に苦しんだ？新東京？の統括理事会は、重大な病気を患ったものや、事故に巻き込まれ、生命の危機に陥った児童に限り、それらと同じ違法な新技術による治療・それに伴うサイボーグ化を行なってもよいとする、？緊急避難法？を可決した。

この法によって命を救われた者達の中で、特別に精神的・肉体的適性を認められた者は、一切の治療費を免除される代わりに、統括理事会と直接契約を結び、その技術によって得た力で、従来の警察では手に負えない犯罪者達の制圧・確保を任されるようになった。

第一話（前書き）

ちよつと構成を変えました。

第一話

「はい、こちら第二特務機関？エレメンツ？。課長！？はい、はい、銀行強盗ですか？」

夜の繁華街　その高層ビルの最上階にある小さなオフィス。テレビ電話で受け答えをしている十代中頃程の少年　けんさきりん 剣崎燐。

どこか鋭さを感じさせる容貌に黒茶色の瞳＋黒い短髪。キツチリと着こなした、紺色の制服。

？緊急避難法案？通称？法の抜け穴？によって生み出された、違法な技術でサイボーグ化された少年少女によって結成された第二特務機関？エレメンツ？のリーダー。コードネームは？火？。

その能力　両腕の有機義手に搭載された電磁カタパルトによるワイヤー射出と、それによる卓越したクライミング能力。腕一本でどんな壁でも登り詰める？クライマー？。

「そんなコトに我々？エレメンツ？が出勤しても　はい、はい、我々の実力を試すデモンストレーションというわけですか。分かりました。直ちに現場に急行します」

電話を切る。顔を上げる。

オフィスの向こうで、二人の少女　あさぎりのは 朝霧木葉としんぬいり 不知火瑠璃が壁一面に取り付けられた巨大な？貼り付け型？テレビで弾幕ゲームに興じていた。

画面全体を塗り潰すような馬鹿げた弾幕。それを躲し切れずに敗北した少女　朝霧が振り返った。

気の強そうな容貌に栗色の瞳＋黒茶色のポニーテール。剣崎と同じ紺色の制服を、こちらはややラフに着崩している。スレンダー体型。

剣崎と同じ？エレメンツ？の初期メンバーで、剣崎とは十年来の幼馴染。

その能力　身体のおちこちに移植された人工筋肉による超速駆

動。数メートル先で放たれた弾丸すらも躲す？インファイター？。
コードネーム？風？。

「やつと初任務？燐」

「ああ。ちよつと意外な形だが」

「銀行強盗ね。それくらい警察だけで解決出来ないの？」

「まあまあそう言うな。犯人は俺達と同じ、違法な技術で造られたサイボーク集団らしいからな」

「へー、それは面倒だね」

その声とともに、ゲームに勝利した方の少女、不知火が立ち上がった。

中性的であどけない容貌に蒼い瞳＋金色のショートカット。少し暑いのか紺色の制服は脱いで後ろのハンガーに掛けてあり、白いYシャツを身に纏っている。スレンダー体型を超えたスレンダー体型
|| 貧乳。

同じく？エレメンツ？の一員。追加メンバー。

その能力 両腕に移植された振動補正機構と全地球測位機構によるスコープ要らずの精密射撃。数キロ先のコインすら百発百中？スナイパー？。コードネーム？土？。

「やつとボクの出番か」

「随分楽しそうだな？」

「そりゃそーだよ。もう退屈な訓練には飽き飽きしてたからね」

「それは頼もしいな」

「隊長。目的地の解析は終わりましたが」背後からの、事務的な声。
凄まじいスピードでテーブル上の超極薄パソコンを叩いている、
4人目の少女 涼月翡翠。すずきひびすい

子どもっぽい顔＋灰色の瞳＋銀色のセミロング。剣崎と同じ紺色の制服をややタイトに 厳密には胸がつかえているだけ 着こなしている。ロリ巨乳。

やはり？エレメンツ？の一員で、メンバーの中では最も新人。

その能力 脳の演算機能の一部を外部のコンピュータとリンク

することで得られた、コンピュータプログラムを感覚的に読み取る能力。自身がどんなウイルスよりも凶悪な？ハッカー？。コードネーム？水？。

「じゃあ、行くとするか」

4人は各々自分の装備をチェックすると、オフィス内に設置されている開閉ボタンすら無いエレベーターに乗り込んだ。

そしてエレベーターが下降している間に、4人は指紋・網膜などの厳重なセキュリティチェックをパスし、そのエレベーターを降りると、このビルの表向きの施設である、とある有名量販店の従業員室に偽装された部屋に出た。

その従業員室の裏口を開け、比較的人通りの少ない裏通りに出る4人。

「全く、ここから走って行けっただけか？」

先程の電話で示された場所である、とある大型銀行までの遠さにボヤク剣崎。

「別に、私は走って行っても良いんだけど」靴紐を結び直す朝霧。

100mを5秒未満で走り切る朝霧の圧倒的脚力を考えれば、数キロ先の銀行と言えども数分で到達は可能であろうが、ここは人通りの多い繁華街である。

「止めとけって。それじゃどれだけ怪我人が出るか分からない。ここは普通に、タクシーでも使って行くか」

「いえ、先程の通信先　つまり課長の通信記録をハッキングしたところ、どうやら課長自ら私達を迎えに来ているようです」

そう言うのは、先程から最新式の多重折り畳み携帯コンパクトフォンを操作している涼月。

「へえ、あの課長が自らねえ」

「あ、アレじゃない？」

その声と共に、突然一つの方向を指差した不知火。

剣崎はその方向に目を遣ったが、高層ビルの壁以外何も見えない。地球測位機構によって衛星の情報をダイレクトに得られる不知火

にとつて、本来見えない場所を観測する精度は常人が直視する場合のそれを遙かに上回るのだが、最近その能力を身に付けたばかりの涼月は、その異常な視点と普通の視点の違いを上手く切り替えられないのである。もつとも、数ヶ月前と比べると随分マシになっているが。

「……すまない。俺達には全く見えない」

「ああそつか、ごめんごめん。じゃあ、皆ボクについてきて」

不知火を先頭に、大通りに向かって走る。大通り。さらに大勢の歩行者が歩いている歩道をつつ切る。駐禁エリア。そのド真ん中。

見覚えのある赤いスポーツカーが、白昼堂々そこに駐車していた。

「おう、お前ら。早く乗れよ」

近寄ってきた4人に声を掛けたのは、黒いスーツに身を包み、黒髪をおかっぱ風に切り揃えた妙齡の女性。ただしその顔は白い仮面で隠されており、その表情は一切窺うことが出来ない。

その女性の経歴は謎に満ちており、かつて涼月は三日三晩にわたって彼女について調べたことがあったらしいが、彼女に関するデータは一切見つからなかったそうである。

また、剣崎が初めて彼女に会ったとき、本人に名前を伺うと、？ シークレットな課長？とはぐらかされたため、以降剣崎は彼女のことをただ？課長？と呼んでいる。

そして剣崎はその車の助手席に、他の三人は後部座席にそれぞれ乗り込んだ。

「で、課長。今回の指示は」

「ああ、今回お前達に細かい指示は出さないから、お前達4人の力だけで何とかしろ」

投げやりに、それでいて楽しげに命令する課長。いきなり車を急発進させる。

「涼月、敵の戦力は？」シートに押し付けられながら、さっそく作戦会議を始める剣崎。猶予は現地に到着するまでの数分のみ。

「まず銀行正面に大型の？機械獣？一体と、逃走用と思われる特殊

装甲車が一台。そしてその両ドライバーの2名。そして銀行内部に、おそらくサイボーグと思われる武装集団が5名。なお、その内一人は奥の部屋で人質を監視しているようです」いつの間にか銀行内のカメラをハッキングした涼月。ノート大に広げられた多重折り畳み携帯（コンパクトフォン）に映し出される銀行強盗達。

「不知火、この奥にいるヤツを相手に気付かれずに狙撃出来るか？」最大のリスク　一般人の犠牲　の排除を第一に優先。

「うーん、それはちよつと無理かも。正面に立てば出来なくもないけど、その前に絶対バレちゃうよ」

残念そうに首を振る不知火。

多重折り畳み携帯（コンパクトフォン）に映し出される銀行強盗達の様子を見ながら思考　問題の1人は他の4人から少し離れている　人質が閉じ込められた奥の部屋　その手前の階段　防犯用シャッターの存在。剣崎の脳内で答えが導き出される。ちよつとその瞬間、車が現場に到着。剣崎は三人それぞれに指示を出した。

「涼月はここで無線機を使って全員のバックアップ。俺は上の階から突入し、一番奥にいるヤツを強襲。朝霧と不知火はタイムミングを見計らって正面の敵を撃破し、その後中に突入してくれ。少々遅れても問題は無いから、絶対に先行しないように」

「了解ッ！」通常の材木切断用チェーンソーを数倍に拡大したような形状の、対機械兵特化型チェーンソーを構える朝霧。

「了解」狙撃用スコープを取り外した消音自動式ライフルを手に取る不知火。

「了解です」？エレメンツ？専用の無線機を取り出す涼月。他の3人の耳に付けているそれと回線が繋がっているか確認する。

「では、先に行く」

車を降り、銀行強盗達の死角から両腕のカタパルトからワイヤーを射出　ハーケンがビルの壁に突き刺さる　ワイヤーを引き戻そうとする力で跳躍し、空中で反転すると、壁に突き刺さったハー

ケンを掴み、2階の壁に着地。そして高電熱ナイフで窓ガラスを溶かして穴を開け、その穴に手を伸ばして鍵を開けると、中へ潜入した。

それを見た朝霧と不知火は、車を出て各々適当なポジションを取り、涼月による突入の合図を待ち始めた。

「ふむ、まあそうなるか。後は見てのお楽しみだな」

コンバクトフォン

課長は車のシートを倒して寝転がりながら、多重折り畳み携帯の画面と無線機の音声に細心の神経を払っている涼月の顔を見て、仮面を着けていてもハッキリ分かる程の笑みを浮かべた。

第二話（前書き）

まさかの二話目です。相変わらず文章がハチャメチャなのでご指摘
お願いします。

第二話

劍崎は人っ子一人いないビルの二階を足早に、そして音も無く走る。

万が一にも強盗達に発見され、最悪の事態にならないように。

そして一分も経たない内に、人質のいる奥の部屋　その手前の廊下に設置された非常階段の、一階と二階の間にある踊り場へと到着する。

《予定のポイントに到着した。連中の動きに、何か変わったところはないか？》

無線を使い、打ち合わせの最終確認。答えが返ってくる前に両腕のカタパルトから放たれるワイヤーに取り付けられたハーケンを取り外し、代わりに錘を取り付ける。

《今のところ、特に問題はありません》あくまで事務的な声で返す涼月。

《じゃあ、今から決行する》

そして劍崎は無線を切ると、一足跳びで非常階段を飛び降り、そのまま人質の近くで銃を構えていた男を狙って右腕のワイヤーを射出した。

「なっ!？」

男は咄嗟に顔を左に振って躲す　左に外れる錘　右腕を引き

戻す劍崎　そのまま右に半回転。男の首にワイヤーが何重にも巻き付く。

「しまっ

」

男が声を上げる前に、劍崎は一瞬で男の懐に飛び込んで胸元にタツクル　男に首を掴まれる　男の腹部に高電熱ナイフを押し当てる。バチバチッ、という肉が焦げる音とともに、男は激痛によるショックで失神し、その場にガクツと崩れ落ちた。

(やはり腐ってもサイボーグ。単なる打撃だけでは効果は薄いな。

まあ、合わせ技ならば問題は無さそうだが)

「警察かッ!?」

異変を嗅ぎ付け、拳銃を構えて剣崎の方へ走ってくる3人の男と、その後ろからついて来る手ぶらの男　おそらく接近戦タイプのサイボーグ。

剣崎はその全てを無視し、左腕のワイヤーを射出。

凄まじい勢いで放たれた錘は、近くの壁に設置されていた防犯用シャッターを作動させるボタンをぶち抜いた。

そして再びワイヤーを装着し終えた剣崎の下に男達がやって来ると同時に、防犯用シャッターが床に下り切る。人質の安全を確保。男達のアドバンテージが消失。

「おのれエ……殺セツ!殺セエエエツ!」

3人が放つ銃弾の嵐を、剣崎は側転、前転、前転の連続技で潜り抜け、受付の机を乗り越えて身を屈めた。

《涼月、もっいいぞ》机越しに迫りくる4人の様子を探りながら、涼月に通信する剣崎。

《分かっています!》彼女には珍しく、感情の籠った声の涼月。

《では、突撃してください》涼月からの通信。

《よっしゃあアアアアッ!》朝霧の返答。

その通信とほぼ同時に、銀行内部から響き始めた無数の発砲音を聞き、朝霧は大型?機械獣?と特殊装甲車に向かって全速力で突撃した。

その動物界トップクラスの生物にも匹敵する程の脚力は、相手との距離をみるみる縮めていく。

勿論、相手もただ黙っているわけではない。

「バカなヤツめ　ぐあッ!?!」

特殊装甲車から身を乗り出して銃を構えた男の額に、どこからと

もなく放たれた硬質ゴム弾が命中した。

「バ、バカな……一体どこから……」

額を撃たれた男は特殊装甲車から道路に転がり落ち、よろめきながらも銃を構えたが、再び額を撃ち抜かれ、さらに道路を転がっていく。

「み、見えない、何も見えない」額の皮膚が破れ、顔面を血で染める男。

そして再度額を撃ち抜かれたところで、男は口から泡を吹き、その場で気絶した。

「三度目の正直、か。額に三発も当てないと気絶しないなんて……やっぱり実戦と訓練は違うなあ」

ボヤキながらライフルの弾を装填する不知火「男を狙っていた？ スナイパー？」

そもそも？ 全地球測位機構？ によって壁の向こう側すらも正確に認識することができ、その上？ 振動補正機構？ によって手ブレを最小限に抑えることが可能な不知火にとって、銃の中でも特に優れた直進性を持つライフルなど、わざわざ構える必要はない。ただ物陰に隠れ、そこから銃口を伸ばして撃てばいいだけである。

今回の場合も、近くに止められていた車の陰に隠れ、その車の下にライフルを突っ込んで撃っただけだった。

「ひーちゃん。今度からはボク、対戦車ライフルを使ってもいいかな？」 不知火の提案。

《予算の無駄です》その提案を、即座に切り捨てる涼月。

そして銀行外部に残された最後の敵戦力「大型のヒト型？ 機械獣？ と向かい合う朝霧。両手に持った？ 対機械兵特化型チェインソー？ 通称？ 鎖鋸？ が唸りを上げている。

「クソッ！ 何だお前ら……まさか、サイボーグかつ！」

中に乗っているパイロットの苛立った声。

「まあね。？新東京？唯一のサイボーグ部隊、第二特務機関？エレメンツ？。よく覚えておきなさい！」

凶悪な笑みを浮かべながら、名乗りを上げる朝霧。

「舐めるなアアアアッ！！」

鋼の塊とでも言うべき？機械獣？の拳が、朝霧に向かって振り下ろされた。

「ふっ！」

朝霧は道路を蹴って跳躍してすんなり躲したが、その一撃は朝霧が一瞬前まで立っていた場所を瓦礫に変えた。

「つとと、危ない危ない」着地が乱れる朝霧。？鎖鋸？を構え直す。

《退いて下さい！》涼月からの緊急コール。

「もう、何なのよーッ！？」

その声に反応して、朝霧が咄嗟にバックステップで距離を取った瞬間、？機械獣？の周りで火花が飛び散った。不知火の狙撃。

「どうせ効かないでしょ！？私の手柄を横取りするなー！」

大声で怒鳴る朝霧。しかし迂闊には動けないため、足が止まってしまう。

《不知火さん、今すぐ発砲を止めなさい！朝霧さんが動けないでしょう！》声が悲鳴に変わった涼月。

《大丈夫。関節部に連続で当てれば……》涼月からの指示を無視し、なおも狙撃を続ける不知火。

《ちよつと！一体どうなってるの！？》回線に割り込む朝霧。

？機械獣？のパイロットは相次ぐ銃撃から謎の狙撃手 不知火のおおよその位置を掴み、動けない朝霧を尻目に方向転換した。

(……………これは酷いな)

敵の逃走経路を塞ぎつつ、包囲される危険性を抑えるために地下の駐車場に下り、駐車されている自動車の間を走りながら、通信回線上で起こっているゴタゴタに頭を抱える剣崎。

(……へたに会話に加わるのは止めておこう。それよりもまず)

剣崎は通信を切ると、左腕のワイヤーを射出。駐車場の天井付近に伸びている梁に引っかけ、駐車されていた車を蹴って跳躍。反転。梁の上に着地。

そして腰のポーチからジューズ缶のような形をした閃光手榴弾を右手で一つ取り出し、脇についているレバーを握ったまま、先端についていたピンを口で引き抜いた。

《すいません！しばらくの間援護に回れませ》涼月からの通信叫び声。

《問題な……くツ!?》返答しつつ、男達の放った銃弾から身を隠す剣崎。鋼鉄の梁に次々と銃弾が命中する。

《隊長!?大丈夫で!?》その音に悲鳴を上げる涼月。最初の冷静さはすっかり吹き飛んでいる。

《問題ない》最後まで言わせず、通信を切る剣崎。

そして銃撃が止んだ一瞬の間を見計らって、コンパクトなフォームで閃光手榴弾を投擲。空中で、脇についていたレバーが弾け飛んだ。

それは銃を構えていた男達の中心に落ち、金属音を立てて道路を転がる。

そして剣崎が目を閉じて下を向き、耳を塞いだ瞬間、それは爆発した。

猛烈な音　爆風　それと同時に発せられた絶大な閃光が辺りを照らす。

「く……そ……」

その凄まじい光と音で、一時的に視覚・聴覚の機能を失った男達。その男達の一人を。

「ぐはっ!?!」

左手のワイヤーを使って梁から降下してきた剣崎の蹴りが襲う。重力の力で加速したその一撃は、男を近くに停まっていた車のボンネット上まで吹き飛ばした。

男を蹴った勢いで着地の勢いを殺した剣崎は、続けざまに右太腿のポーチから高電熱ナイフを抜き、近くにいた男から順番に襲い掛かる。

耳を抑えている男の義足 失神している男の義手。相手の肉体と機械部位 その継ぎ目を正確に狙い、鋭さ+熱で切断する剣崎一瞬の早業で三人を仕留めた剣崎だったが、4人目の男 接近戦タイプのサイボーグ がどこにも見当たらない。

《後ろですッ!》

その声に反応して振り向くと、車の陰から飛び出してきた長髪の男が、光る棒のような形状の物を振りかぶっていた。

剣崎は咄嗟にその一撃を高電熱ナイフで受けたが、それを握っていた右腕に強烈な電流が流れ、ナイフを床に落としてしまった。

「グッ!？」

剣崎は右手を押さえながら、長髪の男が放つ続けざまの連撃を、後ろへ下がりがりつつ二度、三度と回避。そして大振りで放たれた一撃の隙を突き、左手で左太腿のポーチからもう片方の高電熱ナイフを取り出し、顔面を狙う。

首を振ってその一撃を避け、続けて放った回し蹴りを後ろに跳んで躲すと、男はさらに追撃せんと迫り来る。

おそらく違法改造された電撃式警棒スタンロッドの電流が右腕に流れ込んできたのだろうと推測した剣崎は、右腕のワイヤーを射出。男がその棒で受け止める一瞬前に、左手の高電熱ナイフでワイヤーを切り離し、感電による相手の自爆を誘う。

「良い判断、と言いたいところですが」

スタンロッド 電撃式警棒に巻き付き、大量の電気が流れているワイヤーが身体に巻き付いたにもかかわらず、男は平然としている。

「残念ながら、これはただの警棒ですよ」

強烈な電流によって赤黒く腫れている右手を押さえる剣崎。確かにこれほどの高圧電流を備えた電撃式警棒など、いくら改造しようが有り得ない。つまり相手の正体は、スタンロット発電能力者のサイボーグ。統括理事会もサイボーグ部隊を結成したんですか、それは知りませんでした。こちらの雇い主は貴方達にほとんど倒されてしまったようですが、まあ、こんな不測の事態がイレギュラーあつては仕方ありませんね。チチチ、と近づけた両手の間に電流を走らせる長髪の男。

「しかしこのままでは、護衛を請け負った私達の名前にも傷が付いてしまいます。というわけで、貴方だけでも死んでもらいたくはないか！」

「危なっ！」

不知火が身を隠していた車から離れた瞬間、車がペシャンコに潰れた。

その原因であるヒト型？機械獣？は車の上に立つと、不知火を踏み潰そうと跳んだ。

不知火はライフルを構えたままバック転で躲すと、足の関節を狙って撃った。狙った通りの場所で金属音と共に火花が飛び散るが、その動きは止まらない。

そして遂に？機械獣？の右フックが不知火の身体を捕えた。

「げほっ！？」

胴体を打ち抜かれた不知火は大きく吹き飛ばされ、ガードレールに直撃した。

「か……はッ！？」

内蔵のどこかを痛めたのか、不知火の口に血がせり上がってきた。不知火はそれを道路に吐き捨てると、落としたライフルを構えた。

「だから無駄だって」パイロットの嘲る声。

「舐めるなアアアッ！」

そう叫ぶと、朝霧はチェインソーでその？機械獣？に斬りかかるが、チェインソーの刃と同じ多層炭素繊維でコーティングされたボディはチェインソーの刃を全く通さない。

「クッ……硬い……」

思わず舌打ちをした朝霧に、涼月からの緊急コール。

《早く地下の駐車場につ！》

右腕のワイヤーとナイフを一本失い、迂闊に警棒や拳を受け止められない剣崎は、長髪の男の攻撃を躲すだけで手一杯になっていた。「どうしました！逃げてばかりでは私には勝てませんよ！」

長髪の男のハイキック＋電撃。剣崎は身体を反らせて回避すると、その勢いでバツク転し、長髪の男から距離を取る。そして再び天井付近の梁に向かって左腕のワイヤーを射出し、鉄柱を蹴って跳躍。そして空中で反転し、着地。長髪の男が来られないであろう高さまで逃げる。

「なるほど、見事なものです。しかし」

そう言うと、長髪の男は鉄柱に向かって凄まじい勢いで走り込み、「その程度の高さ、私が登れないとでも？」

その勢いそのまま鉄柱を垂直に走ると、剣崎の乗っていた梁に向かって跳んで来た。

「この程度なら、電磁力を使えば登れるんですよええ！」

梁からワイヤーを外し、慌てて飛び降りた剣崎の真上で、長髪の男の電撃による火花が大量に飛び散った。その衝撃で受け身を失敗し、背中から落ちる剣崎。

「では、さらばです！」

頭上から降ってくる長髪の男。大量の電気を両足に纏わせた、必殺の一撃。

その瞬間。

突然駐車場の天井が崩れ、瓦礫と共に二人の少女とヒト型？機械獣？が降って来た。

「何ッ!?!」

思わぬ事態に空中で体勢を崩した長髪の男の顔面を、剣崎は仰向けのまま蹴った。長髪の男はそれを躲し切れずに直撃し、道路に転がって鼻から血を吹き出した。

「倒せないなら、倒す必要が無い状態に持ち込めばいいってことでしょ?」

高い位置から落ちて故障してしまったのか、その場から動けないでいるヒト型？機械獣？を見下ろす朝霧。

「馬鹿な……道路をぶち抜いたというのか!?!」

「別に出来なくはないでしょ。アンタだって道路をバリバリ剥がしてたんだし」

「でも、機能停止したのはボクのおかげじゃない?最後の方はオイルが漏れてきてたしね」

驚愕するパイロットと、なおも言い合う朝霧と不知火。

《隊長!無事ですか!?!》涼月からの通信。

その様子を見て、長髪の男は頭をガシガシと掻き、溜め息を吐いた。「援軍、という訳ですか。仕方ありません。それでは私も、そろそろ失礼させていただきますでしょうか」

チチチ、と再び電流を纏った長髪の男は、崩れた鉄骨を次々に跳び移り、先程朝霧が開けた穴を通って地上に登った。

「では、この続きはまた今度、ということだ」

そう言い残すと、長髪の男は夜の闇に消えて行った。

第三話（前書き）

今回は涼月パートです。だんだん文体も固まってきた気がしてきました。誤字脱字の指摘や感想はぜひともお願いします。

第三話

「で、お前達、何を言われるのか分かってるんだろうな？」

後片付けは警察に任せ、オフィスに戻った4人に詰め寄る、仮面の課長。

「ぜんっぜん、分からないんですけど」ふて腐れている朝霧。

「ボクも」割とどうでも良さそうな不知火。

「すみませんでした」とりあえず謝ったという感じの涼月。

「……」怪我の手当てをしながら、明後日の方向を向いて考え事をしている剣崎。

そんな4人を見て、頭を抱える仮面の課長。

「……まずは朝霧。まあ最終的に道路を抜いて捕まえる、という判断は悪くなかった。が、遅過ぎだ。もう少し臨機応変にな」

「ハイハイ、分かりました」

「次に不知火。まあ最初からオイル漏れ狙いで一点射撃をしていたのは分かる。しかし、他のメンバーに何故そう言わない？火力不足なのは自分でも分かっていただろう？」

「……ボクは、あまり他人を信用出来ないの」

「任務に私情を持ち込むな。一応この3人くらいは信用してやれ」

「……はい」

「次に涼月。流石に自分でも分かるな？」

「テンパリ過ぎ、ですね」

「ああ。もう少し落ち着け。あんな言い方じゃ他の3人も聞く気にならん」

「……分かりました」

「そして剣崎。誰も援護に行かなかったのも問題だが、ワンマンプレイは控える。無理そうな相手だと思ったら、素直に引け」

「……すみません」

「では、お前と涼月は残って犯人グループのバックを可能な限り絞

り込んでおけ。他の二人は明朝まで自由にしてよし」

そして深夜。デスクの上に大型のノートパソコンを二台開き、警察から送られたデータや現場で得られたデータを基に、犯人グループと、そのバックの情報を探っている最中に、涼月が口火を切った。「ごめん。私のせいで、課長から」

剣崎と二人きりの時は、基本的に敬語を使わない涼月。率直に謝る。「いや、確かにこの男を深追いしたのは、俺のミスだ」

剣崎は涼月のこういうところは好ましいなと思いつつ、銀行内の監視カメラが捉えていた長髪の男をディスプレイに映した。

「その男だけど、警察から送られてきた犯人グループの証言からすると、どうやら用心棒として雇われていた男みたい。何人かのエージェントを通しているみたいで、映像からも色々調べてみたけど、全く情報が出て来ない」

「そうだったのか。どうも一人だけ、纏っている空気が違うと思った」

「しかし、私がこれだけ探しても何も出ないなんて、課長以外の人では初めて」

「つまり、統括理事会直属部隊の指揮官と同等以上のセキュリティで守られたサイボーグの用心棒か……何か匂うな」

「……統括理事会か、それに匹敵するような権限を持つ誰かが、秘密裏に自前のサイボーグ兵を抱えている可能性があるってこと？」

「俺の勘だけだな。だが、名目上初となるサイボーグ部隊が設立された裏で、統括理事会内での勢力争いが絡んでいる可能性はあるだろう」

「しかし、どうしてそんな権力を持っている人が、たかだか銀行強盗を起こす程度の犯罪グループの支援を？」

「権力と財力は必ずしも一致するとは限らないし、それこそ初任務

で浮足立っていた俺達を、一気に全滅させようとしていた可能性だ
つてある」

「……なるほど。確かに結果的には犯人グループを全員捕縛出来た
けど、そう言われてみると不自然な位、彼らの装備は私達と相性が
悪かったような気がする。特に？機械獣？に用いられていた、多層
オルナノテューブ
炭素繊維によるコーティング技術なんて、まだ宇宙開発の分野でし
か用いられていない最先端技術だし」

「ああ。これを必然と捉えるのは早計だとは思うが、裏を返せば今
回の犯人グループのバックは、そういった宇宙開発の分野に携わっ
ている者なのかもしれない。だが、まだこれといった人物は浮かび
上がってこないな」

「確かに。それなりの権限を持ち、正規のサイボーグ部隊という存
在が邪魔で、なおかつ宇宙開発に携わっている人間。この条件に当
て嵌まる人間は、今確認できるだけでも20人つてトコね。現段階
でここからさらに絞り込みを掛けるのは、ちょっと無理かも」

涼月はそう言うと、その三つの条件に当て嵌まるらしい20人を
リストアップしたデータを剣崎に見せてきた。

「……流石に早いな」若干引く剣崎と、

「悪いけど、単純な情報処理能力では誰にも負ける気はしない」キ
メ顔の涼月。

それを見た剣崎は、軽く伸びをして椅子にもたれ掛かると、窓に
映る夜景を眺めて言った。

「1と0の世界を感覚的に読み取る能力、か。多分俺の見える世
界と、涼月ちゃんの見えてる世界は違うんだろうな」

「別に、この能力が使えるのは電脳ネットワークに関わることだけ
それにもしも私が今、完全に周りの電波を遮断されたら、右も左も
分からなくなるしね」

涼月は同じく夜景を眺めながら、自嘲するような感じで呟いた。

「まあ、電脳技術の小型化が進めば、その問題は何とかなるんだろ
う？」

剣崎は涼月の放つ重い空気を読み取ったのか、あえて軽く返した。「……でも、それじゃあ根本的な解決にはならないしね。やっぱり私は、そのうち普通の身体に戻りたいかな。剣崎君だって、そう思うでしょ?」

同意の要求　それを肯定　あるいは同調してしまいたい自分。そんな弱くて残酷な自分を認識しながら、剣崎はただ正直に返した。「……俺は、涼月ちゃん程元々の自分との齟齬は感じないからな。何とも言えない」

沈黙　非難　現実の認識。あえて正直に答えてもらったことに感謝しつつ、涼月の中に黒い欲望が込み上げてくる。

「まあ、そうだよな。ごめんね、変なこと言っただけでその欲望を隠して返す涼月。」

「いや、こつちこそ分かってやれなくて悪い。じゃあ、課長から言われたことも終わったことだし、そろそろ俺達も寝よう」

涼月の変化には気づいていない剣崎。黒い欲望が、その形を成す。「……ごめん。あともうちよつとだけ調べたいことがあるから、先に休んでて」

嘘　ある意味では真実。剣崎にそれを認識することは出来ない。「分かった。夜更かしは程々にな」

剣崎はそう言うと、オフィスに用意されているベット・シャワー付きの個室に入ってしまった。

「……自分との齟齬、か。そういえば?エレメンツ?の個人情報トラウマをハッキングしたことは今までなかった。皆、どんな傷害トラウマを持つてるんだろう」

それを見送った涼月はそう言うと、再びパソコンに目を戻した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7955w/>

りんたん！

2011年9月27日03時10分発行